見る

越前市立武生第二中学校２年　　川本　一翠

「小児弱視用治療用眼鏡等の療養費支給」漢文みたいだと言って笑った私に、母は、「救ってもらったんだよ。」といった。

対象年齢は、九歳未満で小児の弱視、斜視および先天白内障術後の屈折矯正の治療用として用いる眼鏡の作成費用が、健康保険の適用となる制度。私は、この制度で初めての眼鏡を作った。

一枚の写真がある。顔のほとんどが目でできているような眼鏡をかけて笑っている三歳の私。眼鏡をかけても〇．三ほどの視力だった私。その横には、「初めてのメガネの日。保育園の前で固まって動けなくなってしまった姿は本当に辛かった。」と添えてある。妊娠中の行動が何らかの影響を与えていたのではないか、なぜもっと早く気が付いてやれなかったのかと自分を責め続けた母は、その制度にとても救われたのだと言った。「あなただけではないですよ。一緒にがんばりましょう。」そう言われた気がしたのだと。大切そうに心から言った。この制度にも税金が使われていることを、パンフレットで読んだ。税金は、「とられる」というマイナスのイメージを大きく感じていた私は、改めて、「与えられる」という視点からとらえることができた。援助を必要とするところに、必要な金額が使われる仕組みが存在する。理想だと思った。一人ではどうにもできない人に一人ではないという「想い」を届けることができる。そう考えたら明るいイメージが浮かんだ。

この間、戦争地区の病院設立のクラウドファンディングに私の母が参加していた。自分の金銭を、自分が本当に助けたいと思うところに届ける。こんな使い方があるんだと初めて知って、そしてその制度が身近なこととして、私事として感じた出来事だった。そして、私の眼鏡のことにつながった。今この税制度が、国全体のクラウドファンディングだと思ったら、とても未来が明るく思えた。自分たちの納めた税金がより大切に、必要な場所に必要な人に、必要な時に届けられる制度として存在してほしい。納めるだけではなく、その使い方をしっかりと考え、無駄のない方法を選択する必要性を強く感じた。自分自身が理想とする社会にする必要性を強く感じた。

私は、中学生になり、新しい眼鏡を買ってもらった。その眼鏡は、私の視力をよりよくしてくれ、今までよりも違う視野を与えてくれた。よく見えるようになった私。一人だけでは今の自分はないことを改めて知った私。あと数年で、自分自身が政治にも参加する権利を持つことになる。税を納める義務を負うことになる。眼鏡だけでなく、新しい自分として、「これから」をしっかりと見ていきたいと強く思った。どこに支援を必要とする方がいるのか。税を自分が納めることとなる未来。学ぶことを忘れず、この制度が有益に使われるようしっかり見ていきたい、いや、見ていかねばならない。そう、強く思った。